

# 食品嗜好の適応性に関する研究

(第2報)

長野県立保育専門学院 小松卓郎  
諫訪市豊田診療所 矢島千代

食品嗜好は日常保育の立場から極めて重要な問題でありながら、その成り立ちが身体内外の、あらゆる複雑な要因を含み、单一固定化された概念からは捕捉し難い、動的な流れを持つ為に、かえつて等閑視か、逃避とまではいかないまでも、安易な常識の上に棚上げされている感みがない、とは言い得ない実情であった。われわれは、この問題の基礎的研究の一環としての適応性の問題をとりあげ、小坂動態的体質学をこの方面に応用し、一般的傾向調査と共に体質生理的に、SE型の園児はより動物性の食品系に、WM型の園児はより植物性の食品系に、M型はその中間に、と食品の嗜好性が方向づけられる業績を報告し、この方向に反した食品嗜好の矯正が、園や家庭において、好ましからざる身心の障害を園児にもたらしていふ事実をさきに報告したが、今回は更に食品温度の領域を質問紙法及び面接法等によつて調査した。(調査項目II三五項目)

(1) 食品温度と嗜好傾向 耐暑非耐寒性(寒冷刺戟に弱い)のS型と、耐寒非耐暑性(寒冷刺戟に強い)のWM型とが、冷めたい飲食品に対して、どのような態度をとるかは、この表からも窺知し得よう。更に注目されるのは、年少程、熱い飲食品が嫌いであり、温度に神経質の者が五〇%に及んでいる事である。

園児は一般に冷たい飲食品が好き(六三・五%)である。が、量

第1表 食品の温度と嗜好性

1. 調査対象(222名)(SE型33名, M型113名, WM型76名)  
(男109名 女113名)

2. (%)は対同体質者比(回答不備の例数は除外)

調査項目	体質類型別			組別			性別		計
	SE型	M型	WM型	年長	年中	年少	男	女	
熱い飲食品が嫌いの者	15 (45.5)	53 (46.9)	37 (48.7)	25 (32.8)	33 (45.7)	47 (61.7)	49 (44.8)	56 (49.7)	105 (47.3)
冷めたい飲食品が嫌いの者	4 (12.1)	2 (1.8)	4 (5.3)	4 (5.2)	5 (7.1)	1 (1.3)	3 (4.6)	7 (6.1)	10 (4.5)
飲食品の温度に神経質の者	21 (63.6)	52 (46.0)	30 (39.5)	32 (42.1)	33 (45.7)	38 (50.0)	54 (49.5)	50 (44.2)	104 (46.8)
熱いと多量は食べない者	18 (54.5)	49 (43.4)	30 (39.5)	31 (40.7)	30 (42.8)	36 (47.3)	51 (46.7)	45 (39.8)	96 (43.2)
冷めたいと多量は食べない者	11 (33.3)	19 (16.8)	11 (14.5)	22 (28.9)	10 (14.2)	9 (11.8)	23 (20.9)	18 (15.9)	41 (18.5)

の問題になると、熱い飲食品に対する場合は、その趣きを異にしている。

## (2) 食品の温度と身

体障害 SE型の  
六三・六%は冷めたい飲食品で、腹痛、下痢、嘔吐等の胃腸疾患を経験している。その他の項目にもみられるような体質差は、給食や栄養指導の際に考慮されべき、幾多の示唆を含む事であろう。またその他の調査と照合すると、男児よりも女児の方に、食品温度に対する耐容性が強い成績の一端を示している。それと共に、冷めたい飲食品に対して、園児が一体どの程度の身体障害——胃腸障害を来しているのか、その程度も示されている。

(胃腸疾患を来たした者は三二・六%等。)

(3) 脂肪性食品の温度と健康 寒冷刺戟の際に、脂肪の消化吸収が低く、且つまた遅い S-E型(古侯博士)の特質が観察される。W-M型としても低下するが、特にS-E型の場合は脂肪性食品給与の場合、これらの諸条件が注意されねばならぬものと思われる。

(4) 冷めたい飲食品と食べ合せ 冷めたい飲食品と食べ合せて胃腸疾患を招いた場合、S-E型では植物性、W-M型では動物性食品と食べ合せた場合により障害を来しやすい成績であった。

(5) 総括的に——温度による食品嗜好の適応性の問題は、殆んど未開の領域というも過言ではなく、小坂動態的体質学の導入はここに新たな曙光を見出しえたようと思われる。各項を通じて示された体質差は、ここに詳述すべくもないが、これらを等閑視した場合の

給食、栄養指導等を考えてみた場合、その「保育」そのものにも吟味を要すべき問題点を含むものと言ひ得よう。けれどもこのような体質差を超えて、なお興味ある点は食品温度との馴化と、馴化の過程からみた適応性の問題である。母乳という、適温の栄養源から離れて、幼児らがあらゆる食品への馴化を試みると、冷熱いずれの領域をより多く指向し、いずれの領域の耐容性を、どのように得ていくか、性差の崩芽はどのように認められるか——更にその過程において、どのような困難——身体障害の経験を辿らねばならなかつたか、(1)(2)の成績はこれらの諸問題の解明に、若干の手がかりとなり得てゐるものと思われる。(3)(4)がより医学的にとり上げられなければならない問題とすれば、(1)(2)はより保育学的に追究さるべき問題点と言ひ得よう。

## V カリキュラムに関する研究



### 三才児の保育カリキュラム 構成に関する一考察

(自由遊びを中心として)

しに、所謂標準化されたカリキュラムをそのまま採りあげ年長児との混合クラスの中で保育したり、形あるものへとあせり、一方的な指導を考えがちである。

三才児のよりよい保育を考えるならば、まず、幼児の内にあるものを充分に發揮させ、その芽生えを育てる事が第一である。

平安女学院短期大学付属幼稚園 本城光子  
今井斐侶子

三才児の保育を考える場合、三才児の特徴を充分に理解する事な